

聖書：マタイ 20：17～28

説教題：皆に仕える者に

日時：2020年1月19日（朝拝）

今日の箇所にはエルサレムに向かって決然と進んで行かれるイエス様の姿がまず描かれています。19章1節を見た時に述べましたが、この時はガリラヤを去って最終的にエルサレムへ向かう旅の途中にありました。もう戻ることはありません。そしてこの後、21章でエルサレムに入城します。そのエルサレムがいよいよ近付いて来た中、ここで殊更にエルサレムが意識されています。17節に「さて、イエスはエルサレムに上る途中」と記され、18節に「ご覧なさい。わたしたちはエルサレムに上って行きます。」というイエス様の言葉があります。特別な思いでイエス様がエルサレムへの一步一步を進めておられたことが伺えます。平行記事のマルコの福音書10章32節を参照すると、このように書かれています。「さて、一行はエルサレムに上る途上にあつた。イエスは弟子たちの先に立って行かれた。弟子たちは驚き、ついて行く人たちは恐れを覚えた。」イエス様は弟子たちの先頭に立って歩まれました。そのお姿はついて行く人たちが恐れを覚えるほどでした。イエス様の並々ならぬ決意が読み取れます。果たしてエルサレムには何があるのでしょうか。イエス様はここで弟子たちに3度目の受難予告をされます。すでに16章21節、17章22～23節でそのことは述べられました。そしてこの3回目の予告はこれまでより詳しいもの、具体的なものになっています。3つの点に注目します。一つはここで初めてイエス様が「死刑」という仕方で殺されることが明らかにされています。これまでは「殺される」という表現でしたが、「死刑」とは言われていませんでした。祭司長たちや律法学者たちによって引き渡され、死刑にされるとは、ユダヤの最高議会サンヘドリンの裁判で有罪とされ、死刑とされるということです。2つ目は異邦人に引き渡され、異邦人によって殺されるということです。当時はローマが世界を支配していましたから、これはローマ人によってということでしょう。そしてもう一つは「十字架に付けられる」ということです。先立つ2回の予告では「十字架刑」ということまでは言われていませんでした。十字架刑はもともとユダヤにはない死刑の方法で、ローマが極悪人を処刑する最も残酷な死刑の方法でした。時間をかけて衰弱させ、苦しみの極みまで味わわせ、人間性をなく奪う形で死なせていくやり方です。嘲られ、鞭で打たれた末、このような刑に処される。なぜこんなことがイエス様に起こらなければならないのでしょうか。それは後に28節で語られます。イエス様はただ命を取られるのではないのです。イエス様はそのことによって贖いの代価を提供するのです。私たちに救

うための大きな御業をなしてくださるのです。そのことが行われるエルサレムに向かって、イエス様はこの時、ズンズン進んで行かれたのです。まるでスピードアップするかのように進まれたのです。それは周りが恐れるほどでした。私たちはこの時のこのイエス様のお顔、またお姿を良く心に焼き付けておきたいと思います。

しかし合わせて注目すべきは、ここでも 3 日後の復活が述べられていることです。3 回の受難予告いずれにおいてもそうです。そこである人々は、これらを「受難予告」と呼ぶのは正しくないと言います。「受難と復活の予告」と言うべきだと言います。イエス様はこのゴールをいつもしっかり見ておられました。まず先に十字架が来なければなりません、それだけでは私たちの救いは完成しません。復活に至ってこそ、イエス様はご自身により頼む人たちをご自身と同じ復活の命、永遠の命に引き入れることができます。イエス様はその輝かしい祝福の日を常に前に見つめて進まれました、ヘブル人への手紙 12 章 2 節：「信仰の創始者であり完成者であるイエスから、目を離さないでいなさい。この方は、ご自分の前に置かれた喜びのために、辱めをものともせず、十字架を忍び、神の御座の右に着座されたのです。」 エルサレムが近づくにつれて足が鈍ったのではなく、私たちに救いをもたらすために、先頭に立って力強く、決然と進んで行かれたイエス様のお姿を私たちは感謝しつつ見つめ、礼拝したいと思います。

さてそんな中、イエス様とは丸っきり違う方向を向いていた弟子たちの姿が続く箇所に記されます。20 節でゼバダイの息子たちの母が息子たちと一緒にイエス様にお願いをしに来ます。このゼバダイの息子たちとはヤコブとヨハネのことです。ペテロと並んで 12 弟子の中の 3 人のコアグループを形成していた二人です。その彼らが母親に連れられる形でイエス様のところに来ました。イエス様が「何を願うのですか」と尋ねると、彼らの母は言いました。「私のこの二人の息子があなたの御国で、一人はあなたの右に、一人は左に座れるように、おことばを下さい。」 またどうしてこんなことを求めたのだろうかと思いますが、これはこの時、新しい国がいよいよ始まるのではないかという期待感あるいは緊張感があつたからでしょう。前回見た 19 章 28 節でイエス様は「人の子がその栄光の座に着くとき、その新しい世界で、云々」と言われました。もう間もなく新しい世界が来るかもしれない。イエス様は今、3 度目の受難予告をされましたが、弟子たちはよく理解できなくても何か大きな変化がこれから生じるということだけは感じ取っていたでしょう。それでその新しい国が始まった時には、どうか二人の息子たちをイエス様の次に偉い大臣のポストに就かせてやってください！とその母親が頼み

に来たのです。私たちが思わず考えてしまうのは、この親子はこうして一番弟子のペテロを出し抜こうとしたのか？ということです。先ほども述べましたように、ヤコブとヨハネはペテロとともに3人のコアメンバーを形成していましたが、ペテロがいつも代表役を務めていました。そこで新しい国ではペテロではなく、この二人を！と母親が願ったということなのでしょうか。

そんな彼らにイエス様は言われました。「あなたがたは自分が何を求めているのか分かっていません。」そして問われました。「わたしが飲もうとしている杯を飲むことができますか。」すると彼らは「できます」と答えました。このイエス様が飲もうとしている杯とは何でしょうか。イエス様は後に26章39節で、ゲッセマネの園で「わが父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。」と祈られます。そこから分かりますように、この「杯」とはイエス様が受ける苦難、特に十字架の苦しみを指します。これは旧約聖書以来の用法で、例えばイザヤ書51章17節や22節には主の「怒りの杯」とか、主の「憤りの大杯」といった言葉があります。つまりイエス様が言っていることはこういうことです。リーダーとなることを求めるとは率先して苦しみを負う者になることである。この後見ますが、リーダーは仕える人でなくてはなりません。単なる名誉ある地位に着くことではありません。この立場を求めることはイコール苦しみを進んで背負う者となること、奉仕する者となること、そのために自分自身を使い果たす者となることを意味する。あなたがたはそのことを分かって求めているのですか、あなたがたにそれができますかとイエス様は尋ねます。それに対して彼らは「できます！」と言いました。彼らとしては真面目に答えたつもりでしょう。しかしやはり分かっていないと言わなければならない。彼らはやがてイエス様が捕まると、雲の子を散らすようにして逃げて行きます。苦しみからは逃げて行ったのです。

しかしイエス様は厳しく責めません。むしろ「あなたがたはわたしの杯を飲むことになります。」と言われました。確かに彼らは将来、そのような働きをする者になります。ヤコブは使徒の働き12章でヘロデ・アグリッパによって殺され、使徒の中の最初の殉教者になります。一方のヨハネはパトモス等に島流しにされ、使徒の中で最後まで生きて、主の証しのために苦しみを担う者となります。そういう彼らの遠い将来が、ここである意味で予告されています。しかしイエス様は、わたしの右と左に座ることはわたしが許すことではないと言われます。それは父なる神がお決めになることである。父によって備えられた人たちに与えられる。だから人間的な方法でそれを得ようと画策するの

ではなく、父にそのことはお委ねして従って来なさいと言われたのです。

さて他の十人はこれを聞いて、この二人の兄弟に腹を立てました。これは聖なる義憤と言うよりは、よくも我々を出し抜くようなことをしてくれたな！と焦った怒りでしょうか。彼らもみな同じような心、思いを持っていたのです。そんな彼らにイエス様は教えて行かれます。25～27節：「そこで、イエスは彼らを呼び寄せて言われた。『あなたがたも知っているとおおり、異邦人の支配者たちは人々に対して横柄にふるまい、偉い人たちは人々の上に権力をふるっています。あなたがたの間では、そうであってはなりません。あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、皆に仕える者になりなさい。あなたがたの間で先頭に立ちたいと思う者は、皆のしもべになりなさい。』」ここに言われているのは、この世の基準と天の御国における基準の違いです。この世で偉い人として取り上げられているのは人の上に立つ人、支配者たちです。彼らはその高い場所から人々を支配し、従わせます。そのような権力と栄光が集まる地位に人々の多くがあこがれ、それを追い求めます。その場合、多くの人々がそれを求める動機は自分の栄光ではないでしょうか。高い地位に着いて人々から注目と関心を集め、尊敬され、それにふさわしい生活を送ること。ゼバダイの子らの母と子がイエス様の右と左の席を求めたのも同じでしょう。思い巡らしているのは自分の榮譽です。しかし天の御国の価値観は違います。神の国で大事なことは高い地位に着いて人を従わせることではなく、自分が仕える歩みをする事。他者の益のために奉仕すること。26節の「仕える者」とはギリシャ語ではディアコノスという言葉で、給仕する者という意味の言葉です。後に「執事」という言葉として使われる言葉です。また27節の「しもべ」はギリシャ語のドゥーロスという言葉で、「奴隷」という意味の言葉です。神の国では給仕する者のようにして周りの人々に仕えて歩むこと、また奴隷やしもべのように人々に仕える歩みをする人。その人こそが偉い！と言われています。これはこの世の価値観と全く逆でしょう。当時このように身を低くして仕えるあり方は美德とは考えられていませんでした。それは卑しい者の姿であり、蔑むべき姿であり、避けるべき姿と考えられていました。それよりも自分は強い人間であると主張し、周りの人を働かせ、自分に仕えさせることができる人こそ祝福された人、偉い人と考えられていました。しかし神の国はその反対です。他の人の益のために仕える歩みをする人、その人こそ偉いとイエス様は言われるのです。

そしてイエス様はご自身の姿を示されます。28節：「人の子が、仕えられるためではなく仕えるために、また多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるた

めに来たのと、同じようにしなさい。」ここに神の国の基準に完全に生きておられるお方の完全な模範があります。ここにある3つの言葉に注目したいと思います。一つ目は「来た」という言葉です。この表現はイエス様はこの世に誕生する以前から存在しておられたことを暗示します。イエス様は永遠の昔から存在しておられる神なるお方。その方がご自分を低くして、人となってこの世に来られました。このことだけで、この方の大いなるへりくだりが示されています。

では何のために来られたのでしょうか。2つ目に注目するのは「仕えられるためではなく仕えるために」ということです。神であるお方がこの世に来たら、人々に仕えられて当然です。人々から称賛され、あがめられ、尊敬され、仕えられて当然です。そして言うまでもなくイエス様はそうされるにふさわしいお方です。しかしイエス様としては、仕えられることを求めて来たのではない。そうではなく仕えるために来た。神であるお方が関心としていることは仕えられることではなく、仕えることである。しかも私たち人間どものために、罪人どもの益のために、ご自分をささげて奉仕するため！というのです。

そして3つ目に注目することは、「多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるために」ということです。神であるイエス様が人となって地上に来られてなされた仕える歩みはちょっとばかり仕えるという程度のものではなく、そのいのちさえも与えるというものでした。なぜそのようなことが必要だったのでしょうか。それは「贖いの代価として」とあります。「贖いの代価」という言葉は奴隷や捕虜を解放するための身代金を指す言葉です。これは生まれながらの私たちはまさに奴隷状態、束縛状態にあったことを意味しています。それは罪の奴隷であり、サタンの支配下にあるという意味の奴隷状態です。私たちは自分では気が付いていなくても、実は罪の力にがっちり捕らえられていて、サタンの支配下にありました。そこから自分を救い出すことができず、そのままでは滅びに至る束縛状態の中がありました。この悲惨な状態にある者を救い出すために、贖いの代価、身代わりの犠牲が必要とされます。イエス様はそのためにご自身のいのちをささげようとしておられるのです。私たちを真の自由へと導くために、そこまでご自身をささげて仕えようとしてくださっていたのです。

このイエス様のお姿にこそ倣うように！とここで言われています。もちろん私たちが何らかの仕える働きをしても、イエス様のような贖いの力を持つわけではありません。

しかしイエス様が私たちのためにへりくだって仕えてくださったお姿に感謝して私たちもそのイエス様のようなように！とされています。これが神の国の基準であり、神の国で高く評価される価値ある生き方なのであるとイエス様は言っておられるのです。

果たして私たちはこの世の基準と天の御国の基準のどちらに立って歩む者でしょうか。この世の基準はやがて天の御国が最終的に完成する時にはすべて引っ繰り返されます。それによって、前回見ましたように「先の者が後になり、後の者が先になる」ということが起こります。すなわちこの世の基準で人の上に立ち、人を従わせ、自分でも周りからも偉いと思われていた「先にいた者たち」が後になり、逆にこの世の基準では人々から見下され、仕える歩みをしていた、いわば「後にいた者たち」が神の国で先の者たちになるという大逆転が起こる！ともすると私たちもこの世の基準に立って、人の上に立ち、人から仕えてもらうこと、人を動かすこと、人から羨望のまなざしで見られるような地位に着くことを求めて生きやすい者です。しかしそれは天の御国とは相容れないあり方であり、やがての日にはすべて引っ繰り返されるあり方です。私たちは自らの歩みを振り返って天の御国の基準に従って生きる者へ導かれたいと思います。私たちにそのための力はなくても、イエス様を見つめる時に、そのように生きるようにとの力と導きを受けます。神であるイエス様は私たちの救いを心にかけて、人となってこの世に来てくださいました。イエス様は仕えられることなく、かえって仕えることを求めて歩んでくださいました。そして今日の最初の箇所でも私たちの救いのために、恐ろしいことが待っているエルサレムに目標を定めてズンズン進まれ、ご自身の尊いのちさえもさげして私たちに仕えようとしてくださいました。このイエス様によってかけがえのない救いを頂いたことを心から感謝している者として、私たちもこのイエス様のあり方に倣う者へと導かれたいと思います。そこにイエス様とともに天の御国の基準に従って歩むという本当の喜びを味わい、また天の御国が完成に至ったその日には、その基準に従って歩んだ者として神によって高く上げられる幸いと光栄に生きる者へ導かれて行きたいと思います。